草庵集蒙求歌解八

巻下

草庵和歌集蒙求諺解巻第十一

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

恋部下

二條入道大納言家十首　初度

ひぐらしのこゑもとぶ雲のはたてにかすかなる秋の夕べ

さをしかの入野の萩の花ずりの袖こそ人丸方十新古秋下

まがきにさかりなりけれ

神尾花を妹がゝ袖ふれてをぐるまとしに付ていつかさて。

あぢさゐのうつろひにけるかりてをぐるまとしに付ていつかさて。

と恨しかも思ひ初しかの字は神尾花をいとゝ成く変て来しの

神よ前尾して重くいつかうつろひにけり秋植物に出たり

等拾遺抄に大臣家三首　重之

とけぬことをうらばかりしたのまれぬ人れんりうるれたひと
色ゑえでうつろふ物は世のなかの人のこゝろ花にぞ有ける 小町古 云五
りの花ゝ色はうつろひかゝるまやすきうたゝていつり 我のゝわ世を
うぐいすゝ鳴ん人りの花のゝうつろふ 後人不知 古云五 ゝうらて我身
ふるゝ詠ちゝは人のいれ花ゝ教ける 伝春上 花のゝ下ひとりぬけるゝ
いとんゝうゝ也人れ下ひとりをとれて花とひとくゝやれむのひとゝ
をゝし下ひとりをとくゝうつ 三古今春の山井れはらむすぐゝや
花りの下ひとりをゝくゝとうん 基後彩 初云 仏て思ひ出れてなぐむる
春雨ゝ花の下ひとりいとうん 後人不知 彩古春 白雪の老ゝ降ぐゝるゝ足
てぐひとくゝ花をうれて志ゝ舞 清少納言 女彩格歌 重て人れ山のゝけぬ
ふゝも花みぐゝ花人りの山の花ゝれぐゝ花の色ゝぐゝうほり
かゝうはうれ来ゝて青ぐゝ也山りの花ゝ色ゝうゝて花の下ひと
ゝ下ぐゝをそぐろゝいひうゝいうん志ゝ也

はゝた大納言家旬十首　寄玉恋

ぐけて花みぐれぞまろゝ玉れをのわぐれひとぐゝ中りの契へ
寄玉恋 よせて 玉ゝ恋ゝの方也ゝ我恋ゝの花れゝやひぐきかゝ也ひ
小ひとくゝんがうぐれまろゝ也ゝ細い根本わぐなる人のゝうて
契ゝうしゆ也ゝ玉とけゝうくゝ緒りゝわぐれむひとぐゝうしゆけく
玉の糸りゝ花ゝくゝいうゝ玉のをゝ玉を貫ゝう緒也人下を云
う非上部 恋ゝの方ゝ中ゝにの下ゝ出ゝうぐけうゝむけぐゝれく
皆緒りの縁也

式部ゝ家百首

うぐくゝとえやいたのまん水風ゝ吹りきれうるゝやとゝさを
寄山恋ゝ恋ゝの方也ゝまれふなびきて来てれゝもえやいるの
まん松まれゝ也ゝ細ゝ根ゝるぐくゝそのきれゝあゝこれゝうゝ
ゝ行ゝちゝる人りゝ山れゝいづ方へうゝはうぐきゝぐゝこゝ

きゆへ也えやハの詞ハさゆうハえをら秋ぬしと云儀也 かくらぶに
えやハいづきの月もまさしもさらぶなうゆるらんと 寛平御歌合 拾遺一
おぼつかなるものとださのハきまあえるハ吹くしもかはうら秋 拾遺 秋下
有明の月のえよ鳴れ音もえやハ出よ乃里の秋風 壬二 中

縉た太臣家之首よ

こりのよみしをすゝむひょ去り又年試夢ゝ移ろぶ秋のかね
袖年適の奇也。比来人を思ひてねらる内夢よのこあてはに。
をれよかれてごよし織よ年てても又差よ年てらし色ぬ年ぶる也。
ぞまぶるハゆぶ○ゝこゝよ色也。懸て年萩ハ色ゝあらどらふゆへ
夢のゆうにぶいうる也 君やこし我や行らん知わらし夢か現か
の袖てかたぬそて 伴物 見てし又年萩めれなる夢の内よゆかで
浚ぶるくうれ所も乏ぶ 若紫巻 乃類也

初年恋

山鳥れ尾れかゞみをのぶりわびゝるりけれりけさもがか
山鳥れおのれの尾に鏡をかけて見べみてそなたよ也をけれ 万葉十四
山鳥の鏡の事説多し。山鳥は雌雄一所に棲ど。尾を隔てそ
ねて朝よ妻を見ぬゆゑ。鏡をかけて長き尾を鏡の如く丸く
されば妻のかげのうつりける也。ちるぐよ。寿て年たり。此外袖中抄よ
委しう山鳥は友をうしなうれ鏡を見せてもれハなきしらんいと
義也谷つぶそなるわぶれしも色くかし 枕双紙三
異苑曰。魏武帝時南
方獻山雞。帝欲其鳴舞而無由。公子蒼舒令以大鏡著
其前。雞鑑鏡而舞不知止遂至死。事文類聚 五車韻瑞。山雞
條下引異苑同之。又同書鸞條下引異苑曰。罽賓王一
鸞三年不鳴。夫人曰聞見類則鳴。懸鏡照之。鸞睹影悲
鳴中霄一奮而絶。事文決録注云。多赤色者鳳。多青色
者鸞云云。又鳳之族也。博物志曰。山雞有美色自愛其毛

終日影水に賦則溺たるべしなどいふ。山鶏也。鶯も非。
異花乃類ハ鸞也。鏡の事有。山谷題鴨詩に山
雞照影空自愛孤鸞舞鏡不作雙 例 ふるの神尾は鏡
かけてのくもるく別の彩とぞ行公は師 長恭 長五 をのぼるとぞ云は。
ゆるくふるてあらくやふをものづくかりずもかしと句をへぶ
ゑゆるゑ後もあり。続よりせて。新てついそのらてゑ人乃ふ
うつしびもがくいつ後也。くるおのをれろくとをの字はし桜
なる詞乃ろ紙うけつづきそよもし格も。自然ゑ有也。岩つ
しいくゑ。ぞくもぐのもびすゑ類也。但りゆくれ事とこのそ
よむべきはあびぞくろ尾乃注。然れ植物次しか

逢恋

ちくまでおもてれ夢をつくしても知るうとあるとい
枕れ夢くはくゑくあつのばば桜よ夢のつるる也 ちくさうべど 貞

なぐくれ夢枕夢のくでゆらけよ人をみ 大和物 ちくるれでいりに枕
乃思ふん夢ちくはるくはるる床のくくきを 新続古 志五 ゑくて今乗計
や七夕の枕く夢乃はるくはるるんでるる 万葉 巻十二 巻方多乃も恋絶
てゆくくあいざしるば若ぐ祝し桜よハ夢乃はるくとこよいお
乃くく松乃夢をいとくしひきれしどもゆくくといざ山ふたまて
根の枕くはるとてあるをばゆ人いちるゆどとも也ゆるくくる羽根
乃はるる事をついて夢の方へも縁ゑ物也

古今 巻十 ふくれあ山を

ちくさちくん枕までちくまゆ実をるけうちるゆゆゑ相坂れム
八ちれ我通坂の実ハよいくごに折もれちくん 伊勢物 逢
坂をこゆるゆ人ゑ事ゑまゑ実寺のれくるひまふ
逢ゑくゑ事ちしゆゆ人ゑまれて逢ん事もはるめくしゆ今一度
何とぞくして逢ゑくゑ人ゑ事也くゑ人ゑくる

契恋

ちぎりしてそ人はまことのちぎりなれ来すてしいなかたのまん
今までもいかく契てもといざらもぐゆりくゆりてとそ思ひ堅
のちぐいもてて来りるれいかゆ思ことはけらそ人りの心の誠いも
らしてう神ちそれども今まそのゆうさをいかく思くいかぐらた人
れるるれいかり来うけていいうぐおんそのくがらも也ちをとこ
詞ちの心をつまをとろろ人
人の後といいぐもてもも 相撲は 拾恋三 詞を用いより 恋ひの行来
まぐいかくけまだ久を游りの命くもの 儀同三司母 新古恋三 はるもかりる

等持院殿の大臣家歌首

とれづくれ花ばりをういくまれりうこ後いうの成ぐもうもの
 手 逢ふてはあいうをういくまの水れりて後ぐもの思ふ 俊成後拾 恋三
 御 君ゆのくれれやはういまれいあうちうて 寄物 千載 恋四 屋

くれくて逢て花をうつすいうりに仮神よ逢く事れいかれむこ
はまりけくいぐ貴ぐきことはゆぐこうく絶どぐまくけくこと絶なば
いうふうかく降とも也花をうういとと仮同じ物よ行ちう後也かいと
うれ川後とうもていうり水の心をいかれ深きをを波のい池れ
れ滝の心なくいう 寄野川 ふれ心いくもくくも滝の音よいを
てぐとぐぐ心 読人不知 古恋三 ちうて横に花水のいて降せく
ぐやる 嘉祐三年 拾春下

祈恋

うは浦とうとまは和をまきて川神のくわまくくれちう法
久くくれて仕恋ぐ乃ぐ命也ぐうか浦ちを逢ゆ命とうて
後也かるいうく有也 かるる 三条八幡宮 新古雑中 川の後く浦ちくいうり羊くくをこひ
ううも歌きけるか 三条八幡宮 新古雑中 川の後く浦ちくいうり羊くくをこひ
ちうしてもりいぐうくう降く神く祈くうども利生もなうるくゆ

神をも恨みなどせしに、螢ハとびゆくは、せうく利生のありて逢
しかるゆゑにかの御神もあはれにおぼしめして、まもりくだし給ひて通ひて
貴船川の水に神のいとめでたきありさまを見しゆゑに、末の方ハあはれなる
うつし事をもいひて、ほく神乃利生をふかくよろこぶなりし。又神の
こゝろには、みなねがひを適ふ神のみわざ、事をもこえてといへり。
木舟に忘紙給ひし事忘上給身忘なり

寄枕恋

波かゝる濱松が枝をまくらにてゆめなどハなしにかはりやせん
幸大伴のみ師の濱れ松が枝を枕にねぬる寝覚井すゐ也 一 万
吹ハ浪ろ岸乃松ちれや枕におもかれてゆきかへる也 人丸集 古恋三
思ひつゝあひなれし住の江乃松の枝すゞろにおもかれなるや 拾恋一 読人不知
ゆきしの松ねむさればよ浪かふ寝かれよるを 読人不知 拾恋一
十八公榮霜後 露松が根ハ波乃かゝりて寝かれやとき

物なり。又波が打かけてあら根が寝ものとあり。かれなハ
松が枝を枕にて寝るにハあられても夢のかよひぢれ。枕とか
ゝさげても、あられやせん。おもくれそらばいかにきんと也。ハ
枕の也。又浪に沿ふ方をもそへていへり

民部卿百首に 旅宿逢恋

いかにせし寝ども消の草枕又もむすぶべき契ありなれど
草枕とて旅にかけ結ひて枕にするゆへなるを
枕とて草引結ぶ事もせず秋の夜ぶかに寝まれなくに 伊勢 古旅
をとをみなくらおもけいて草の枕にわすられね 拾別
初見るにおもふきけバ草の枕に寝かきにあるか 旅
秋の萩を草の枕に結ぶ夜ハ近くも康乃おもてなれ 前余行家 同秋
宿ハ一夜にかりれ事なるに、人におもはれバ又まさかれて逢く契を
むすぶべきかあらばかんのかしまぶ。さらしかまれに逢ひと

きえこそしたゝぬとの字。雪とあと共よのゝ也。又雪のふるくれなゐ有。
もの字物字也。きえわしはきえとゝ下句の意。彩人伝のまゝ
結ふ八契こ。松しぶうけてよわり。雪いと縁あり

法花経毎月次三首よ　重家

ふしくてすれしうきあるさよさ衣恨さくして中うわうれ
衣ぬぎしにゆみのりいうるめうこさをわ衣をさ人添てけるか（読下和歌古今三）
らいくていうく云ちてふ也いつれも言ねく
云詞乃位同じ位也　ふしくて重衣いこふし天川雪立添るよ明
ずあくもん（読下和歌古今）　云くてきく衣をかさひて初ふれども日法
あくあまの久てき恨乃紙うてあるゝ。二人の中にあるとあるう衣
ぶか中にのりふいをうけてあくん衣を添そ恨ふ人中に
ゆくいうう。衣とうまあるゝ云いう。重衣いこ人乃衣とひふんよ言ね
てきそわるゆん重衣にいふ也さて別さ衣しんゆんくれ衣と

きそ帰るゆく衣ぬくと。明の事をいふ也

茅舎院賜花大臣家三首よ　不通衣云

たがあくふまう衣ふけあくうこ山ん重ていれ初ふくをたまうた
題ハよるすぐさまうびくゆくゆるふ也雪のま計重て衣をも
あうさに行なくゆるうは恨方へそ行すんぞうれば仕方とい程
なくおさてひうを行ふれども。さうは行ふひて衣乃ようあうして。
恨ふるすんふ也下句ようく題よ叶へ也

二條入道大納言家歌合　重家

きのづくふ玉れをびうう重衣いれあけるばくうや井もいみぎきん
初ふるいいむれをびうう井ふりてはくさ仏のなぐくんゆくん（行物）
ひかとう乃。衣のうれ中はくき重ゆ井。何うく思ぐれ
さうんゆうくわくて重て仏乃わさまう。ゆとむうくをうにずこれ

まの事なれば袋の明るばかり思いみだるゝ也。玉のをとは竹
うてはすこしれまの事也。法の縁と彩とをうつすのをいふなり春
しく消を

三月ばかり祝いのふる紙まちまちあるいふ意をもたれたるやうにん
前方はいろうれと袋を明しうれてあるのれを結しに人の意を
まとも。あるはたらばて比来結ひまなしいていそがてやうんと
いひてどやく別んまれ兼て出てきたりあるく鳥紙
恨ふるこゝ結り

聖護院二品法親王家五十首 別恋

ある月れ夕はきぬ紙うゝみてと祝ふやいうれこゝぬのそう
別のうきたつけて夕付鳥の明るを恨る也。あるのあたるうふ
を恨るうゝ我いなくうゝでき来るうたれも来ふをそしる明
なう。音やいなうゝ明いいうゝでは也きるくい別の縁也

ふのめれおうくと明ふいたをものがきるくなうて出ていさ 法今和古恋三

寄月恋

暁の八しゝ月のなくもうれ別を人れうれふかこそん
暁ふ別うへさ明るれも。別をしゝれいあるうの明まくみとそて鳥
のうまざのゆうれて別ふ也。うう秋ば世の中に月の明とて
来のなくハ人のふゝ別をいそくしいてうゝみうゝべきあ。
鳥れ明そうき是。上の句の格。恋の上の夕待恋よ出そう 例春の袋
のみどうき程をいうて八声の鳥れ之れうん 新古今 恋四 別しい
うゝこゆう実路ゝよ紙体ゝ八袋れうれ月紙そうゝる 雅和歌 恋五

彈正親王家歌合

別恋

明あれどつうまゝゆで月れ祝のきこゝあまだ明る袋出る
月はあけども。つうと兼て。柄うゝする明よ袋を明それどゆゝる
鳥も明ゆあて。袋も明ゆゝ袋を明ゆゝ別る也。

よいおもしろふにちやく別るべき物を。さそくゆうきまく。人やしらぬ
きしのことばかいするものゝふくあるゝ也。ふうくのこゝろなる也

入道前太政大臣家三首

待れ称いうれ地おろしてれやしまていふみをまあり月ハとりの
別るゝ時よ。鳥の鳴音(かね)はうき物なるらし。又重(かさ)ねて逢(あひ)て待るゝ音(ね)
をいふよ。吹くよあしてれ也。今夜(こよひ)別るれば。又重(かさ)ねて逢ん事の
はかりがたくなれバ。くやうじまくにとはがねよ逢て別るといふ
きながらへこのあくにまてかうつきをいとひぬきる也。又逢
そんしいふなねらし

不動院寺にて云ふよし侍し時　月前別恋

このまゝに又やみざらん白妙(しろたへ)の袖のまつ袂れあるなけの月
一首の心。前に調る趣(おもむき)也。又やみざらんハ重ねて又みん事も
はかりがたき也。又いえなるべき也。家隆の又やみん又やみんど

らん白妙の袖きえさる秋萩の花しよるハ後成卿の
又やみん伏見の桜がり花の雪ちる春の明ぼの
よろそよみ紙。定家にハ。又やみんに又やみんげんのこゝろハこゝろ
物をとり定(のこまい)しとも也されども此哥ハ又やみんの心ハ落くひと
へよ又みん事ハかたかるべきといふ心也。例又やみん明石の浦の
さ様波まの月乃明方(あけかた)れぞ　前大納言為家 夫木月　一首の心。別ハうき物か
かつ何かぞ重(かさ)ねて此頃よ逢て別路(わかれぢ)乃月を又見るかれおさまと
ども又みん事ハかたかるべし也なげく也。袖の別ハ。別の時の袖也
白妙の袖乃別ハおしけれど思ひ乱れてゆるしつるかも　二 万　白妙かね
袖の別をうらみて葛津(かうつ)乃濱(はま)よやどりをするかも　七 万　月乃縁
み。白妙の袖紙出ら。又白妙の衣ころとも[illegible]部乃春ことあり。
詞乃優(いう)なる方(かた)あり

右大臣家にて　別恋

うれ中ハうきまどちをさへ関守はうちぬるひまにいそぎけるか

人しられぬ我通路(かよひぢ)の関守(せきもり)は宵(よひ)〳〵ごとにうちも寝なゝん 伊勢物語 此うた

中ハ人のかのうたに兆ぐ人ニ隠まとげられてうれ二人の中也。さて

宵〳〵も無返歌の関守の寝ぬる間(ま)に来(き)つらんハ又別る時(じぶん)なりとも。

関守の寝ぬる間にもいそぐ也。さへには物をこそへて云詞也。夜ふ

に委しく寝に来ぬ夜。関守の寝ぬるまはらかへいできたらんに。

又別路にさへ帰るひまにといそぐ来る也

わかれを

はらかとみるにわびしけまさるかいでてそかにけるけさの別路

さらでも別はなごりおほかるものなるを。されども別をいそがばつらかるべき

に人も別をしみてかへる迄つきぬなしはかへしむしていよ

くなごりは増(まさ)る也。いでそふまとるへいでかはる也　浮世(うきよ)しは門(かど)

さきりえてかくれかこの我身のあかぞそにまる　平貞文 古雑下　前つも 高

九月十三夜停子た大納言家十三首ろ

寄月別恋

明がたハうれ人しりしく思ひ日こし月にかまれとなくきるよかね

前方(まへさき)をとしゆはは口説(くぜつ)などありてたがひにそむきくに寝てよ

もすがらおも居りしかず恨とし離(はなか)れしかにく明方に成て

帰る時ハ有明のはれおなくのこりて人もつまれくはらぐきれれ時(じ)

なるれど(じ)それぞれしきたもよかされてかくうきへしも。別路

にぬれたは。何となく名残(なごり)もをしきまゝの事と思ひこし也。さてかさ

ねて又来し時ハ人及ばともやかしき念(かんぜう)はれたる(あひ)とし

ひくて夜(よひ)ハ一入(ひとしほ)名残も多(おほ)くかくしも有明のかたにて前方と

同じやうに月に別をきるかなゐのをしきまゝなしとあげく也。

さしもの有明人こそわれぐうき人しも別はなおれをしきて

おりえかくさてしは也しものでは月前の語(ちか)をとで又の字は。

春も月〻別今も又月ゝ別をちゝよも

春大臣大伴家三首　　ぬし

あらぬ花は家のうちを別なびけるき月日なれ又やなぐてん
今までなく〻月日をつぐそく今春宴てさて明ゆく春ゆ
横雲の別〻をうておのぶ〻つまるば辛れていつまてん
ともはうりぶ〻てばゝき月日を又なうはまうそやあんと
たげくも横をいは岩ゝ春ゝ山ちゝうるをつるくいふちゝ
例　春の来れ是のの浦〻と浪〻て岩ゝつゝ横をけそう　古春上
秋乃ゆく世ゝ乃浦茅ゝ分ゝ別ゝくゝ光ゝに別ゝくゝ光ゝぞ
雅後撰　秋　ゝ人物をつぐはゝ物ゝ月日をゝ山ゝ流んとゝ
後ゝ撰ゝ　ゝ山ゝをゝどいよゝゝゝ乃ゝ立ゝまゝゝゝゝゝゝゝ
ゝい後ゝ幸のあれいぶ〻ゝよゝゝて別てゝ人乃後ゝ山ゝ
らぶゝぶゝゝゝれぶ〻く立ゝ別ゝ乃ゝゝゝぶ〻ゝゝゝ

乃ゝ人別てはゝ後やゝんゝ思ゝゆゝ一入歌ゝも

大臣大伴家持　　曙別歌

流わをゝ別ゝ別ゝ模ゝ戸ゝ袖ひきゝて又やゝゝん
此五文字ゝゝく物ゝ流ゝ乃ゝ別ゝ流ゝ乃ゝ別ゝ流ゝ物ゝ
さゝ人ゝ流ゝ茂ゝ衣ゝゝゝさゝ物ゝ流ゝ物ゝ　拾遺　限ゝ山ゝ落ゝ雲ゝ衣
流ゝ乃ゝ別ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　巻　物ゝ流ゝ乃ゝ別ゝ物ゝ流ゝ乃ゝ別ゝ
流ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　巻　流ゝ乃ゝ別ゝ物ゝ流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　巻　流ゝ乃ゝ別ゝ物ゝ流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ
山ゝ乃ゝ別ゝ袖ゝ別ゝ　通定歌　古春三　流ゝ乃ゝ別ゝ

等持院賜た大臣家の歌　契別恋

いつとだにたのまぬ夜まこれ言をまてこいてこゝろもとも
此日の言をこそうさきわるれくもぴ言をも契ぶぴたのばるれ
夜ぬくもたりて契れうとこらてしぴ入たもいてこゝろ
き別ぬぴつぐふいぴつぬぴの也定高八俗語よそうわと
云也　かく屋うはたぐうたんん行ふ　古春詞云　歌ぐ

入道前大臣家わく　後朝恋

言ぬぐふまてこも人い契ぬ祢どやゞてまこれ言たこうか
別をちこぐぴ人乃ぬいちみぐこもなく何を契る事をなく
言こまてこさも契ぬぴゆこぬぴ我ぬ人ぬこちふゆぴ
祢乃美よこゆぬぴやゞていぴのまちなぴ寝ぬぴ風
ゆぬぴ言をまてこさ人もぬぬ云侍也倒語也ぴれこい別ぬぬ
人祢ぬ侍ちり

等持院賜た大臣家ゆく　寄木恋

あづぐこぬ寝またふ神い寄をれをつぬまをされ石のさいぬ
杜の社のちぬまけ祢乃神ぬうもあつぐ寝ぬつまさうめる
あづぐして祢ぬこぬ寝まけさ人神い海よ寄けをぬしてを
人て別ぬくけされ祢ぬさの石れちを祢は一入寄けさ也

入道大政大臣家三首よ　後朝切恋

寄まぐいれぬこをてなの侍也祢乃　字たさて侍なしぴをてはいをを
杜の祢ぬ侍ぬ少人也別いぬやまをを乃侍ぬれぐぴ侍れよ別ぐよ侍ぬ
言れ杜ぬ別言れ言い言也人石人言ぬ侍ぬ言ぬ侍ぬ言ぬ侍ぬ一度の人
まぐいぬこ思ぬ命ぐれぬ命ぐれぬみをぐぴを寄ぬ人ぬ別のうれまぬ今い
命も絶ぐをぬ言ぬまぐい強ぬぬも別ぬ命れ侍ぬ也切い
うき事の身いせまる侍也　云行ぐのり来まぐいれぐれ事人

をかざるとの命下るを（俗同三司毋彩古点ニ）　乃ちとりて

茅舎陸賜た大臣家に首を　　坂胡点

あいてそとさあられろこのくをけうやゆくうきたくさまし
ろ〜まろびといろ〜しやくいてまーやを思てたをかやをてたぞよ
ちど詞ようえいくすーて為て思ーまなぐ〜ぞ〜どのおろんぞけさろ
ゑ〜中にもくつ〜おりなりぐかきたくしてゆぐべこと思ぐ〜ぐ〜別し
出ーさふ公紀ーてぐきもたくさんめーもだ物ようい忘ゑをゆる事也

大臣大実朝康家に首を　　坂胡点

今朝面でれぐろうさぐや物ーをくれまり御ふうりもどる
別来てうのまーぐ〜てもあるて井ぐろうさぐやぐらんとおろてい
いてーうども為まりぐ〜ひるの用ても人乃公のかりてぐこれ
事もうてあれーも弱るうさぐやーた世話ようを乱をはくう仏
ちりぐいうりもどするーたかりりもどせーぐろと云公なり社ーも

かぐりもどするを治定してそうもぐて〜たに若業のおに注と
清原たた大納言家に赤公ちる所おく奇ぐまれーよ

寄玉点

ろろれくやゆの絃ふやんろこれろあさあれこまくれろ絃を
ひくこふをこうさかうこたろうけておいどた何をゆの絃こせん
（後人ふ云古点一）　本ちいぐをはーあく絃のまとりいてぐーれ公い命ひまに
いつりぐ奇も同じ後てぐ治ふれてこうれくろ中にこ人の
公がぐうこうれこうはりて定まーあなぐーぐ社と彩ひいろろ
なれまちれぐもさなくてはろーろこうくりて命も絶べま社ぐ
是那ろくをしをちりぐもあのこて命とはるぐ也ゆの絃ふ
う点の奇れやとこ云ものお

藤原宗基ろと歌よみ作ーは　　寄草点

うかりまろ人の契れ清茅原ろいとこ残こ社こ社風ろ数く

こゝろけるハうくあつけるなさいしつまけるが待しゝゝけるがありけり
あられ類(るい)同じてきは也　うつまけつ人を神(から)世の仏抄つしよみどほし
かれよはいのかぬ袖を　後朝(きぬ〴〵)　浅からへ浅き薄(ちうく)恩也ぞれ人れ仏ハ
わすれゆくされはすぐくとみれバかどれくされを絶(あき)いて又他(た)人ヘり
うけるなり秋風ハ絶(あき)とつよせていへり　例　又かゝる人の仏のあさら
いへいつより秋の来れはをくる人　中納言公脩後子恋四
清(さや)けた大納言家にくす首　　踈(うと)き恋
すて紙ぞりふるゆる袖つきがしくてうらみとことに絶わすりか
人の仏のうつ恋みずかは紙ざつむちろ袖らがしゞ年月をへても契られ
絶さぎあるゆへよ我恨もをこしぬを恨と共(とも)に絶わくいてつか
かへてよは命のまらしくるに非(かず)契りの絶すぎじ(とりかはし)共るてあるな
云也中哉ハ二人の中なる也絶いさびしてかば紙さりふくいつめて
うらむ仏ありかすて紙ざるを踈恋とは

民部卿家百首に　　隔る恋

しらずのなや猶とやさんが年月れはゆりハてくハ我ましいいづれん
恋ゆくはけらしはおとなべき身(し)なるもやるとあさるる猶とそる
為んが年月の久しくほすまてはさすが思ひて人のうらみんと
かわりあるをなや猶とやハ我恋するなを猶を人がうりて中ん思ひ
出(い)でてとくふ也　例　恋されぬ身れをたら乞契(り)ぞ年をぬるわしは
逢世夜の仏ばよさん　定家卿恋三　一年にしけ題(だい)に　ひとりぬる床を山鳥
の契りをさりにまする男紙つゝそてやいとりの寄ゐそてと欲よ清子
た大納言家十首稀(まれの)恋　あいさるぬの寄の首と欲よ初まし
家百首に　朝(あさ)毎の八重の隔(よそ)風の寄まだ宣案(せんあん)ぞうに隔る恋(へだゝるこひ)
恋よひとりぬる床を山鳥の寄ハ初也又稀(まれな)恋よ　恋しき人の寄
と初也あるるふが朝毎の寄をと稀恋の寄とする事(か)雑(ざう)ぬ得(しよう)
識者(ちしき)定めらるべし又愚(ぐ)案するに抄(ぬ)し家百首と朝毎の寄

とは逢て不逢恋乃次よ入給ふ。是又識者乃定め給ふものなり。
ひとりねをと云鳥の声の心は　逢事ハまれなる鳥の様をいひてかくいひ
なれ声をのみぞ鳴（元良親王 後拾二）　思ひ根つきぬれるよまれなるも
あは日せかく恋しきとぞ（後拾）　ふる〱は夜ハ雌雄むれつゞきぬる
物なれども、さかなる男をつぐてやはなるゝ。思ひそれはまれなる我中へ。
翻絲をするのみ。添わる男の夫婦をさへ隔てしてなし事
あとい〱へる也

おもふしんを
り私れ八重の塩風一しきふきそのかへ居がくかゝる中なれ
八重の塩風とは大海の体也。さつまがた沖の小島に我ありと
おやにはつげよ八重の塩風（平康頼 千載）　あらくふくせよ沖するを沿まだく舟
の行来もあらぬ八重の塩風（式子内親王 新古恋一）　遠く廣き海を風より波
くせて行河は追手の風をひく人よ彩ひ方よ。風い時のまれかなる
物をぞ思ふかくる也。其のおもくぞ今まで逢ふぞなかなかよりといふ
までもこ彩りしく思ふ人の顔のまた忘れかたき事也。此心を以
ゑる見れは逢不遇恋の哥なるべし

民部卿家三十首に　逢不遇恋
住吉のまつの礒屋の塩竈いつまでからくこひつゝみし
住吉とは心の忘れ易きかなしさ事をよせてより恋のあらくなれは我
順せぬ縁をよ此縁也。塩竈は塩焼煙也。我方よりかく
あふがひさるによせていふ。下句の心は我よりはいつ迄はなれてかく
くるしく思ふこともなかれていつ迄も中〱逢事の無るをとそ

冬恋
水鳥のしたやかにはいつまでもとけれとおもふらん
水鳥の下やすからぬおもひにはあたりの水もこほらざりけり（読人不知 拾冬）
下安からぬとは水鳥は上はゆるやかに、水の下にはあしくべもかくにこ

逢をまちわびて居すれば心もかきくれて我ながら下れ心のや
すからぬ事をいへり下れ心とは云類ひもてなしハ心をさだめて
いづれも忘るの所に浮ぶ玉藻乃床ハ水鳥のねどこのあたり
よ我ぬる衣云我二人ねる床をよせていへり　例 難波潟入江をめぐる
芦鴨の玉もの床に浮ねすらしも　弘庸 千冬　此外水鳥の歌多し

寄水鳥恋

鳰どりのうきねもしらで絶よかりし人のつれなきを何たのみけん
浮巣は鳰の芦の茎に結ぶ物なれば。水にうかひてつれなきを
いへり　逢事のすさみをよせて鳰の巣の浮みしづみて物とて
それよ人 六帖 人の心のうれしきハ人の心乃浮せる事をしかき
ゆへいへり鳰の浮ねもたえて浮て定まらずつれ人の心の頼もし
げなきゆへにしるる通路も絶ぬる也鳰乃浮巣ならぬ鳰の下
よりはかなき何よ頼みけんとハ何ゆへに頼みつらんぞ頼むべきた詠と

いつわりたんハ今まで何として頼みつる事ぞ頼むまじき物をと
後悔する心也

後花山院内大臣家歌合よ　寄木恋

絶ぬるハはしきさへも思ひとりれさだめ心れよすがとやしまよ
鷺坂山の松陰にゆかりて何ん我も見てくる　人丸万九 続古談　絶
ぬるハ哉也人の心のはしきをもしるしげてさへやく絶しき
よ絶ぬる哉めぐと思へば待まじきやをとなり。鷺ハ白きゆへ白
鳥乃鷺坂といへる枕詞也。山城久世郡よ有。水鳥乃鴨乃青羽。
又ハ旅鳥のあすかなとよいひてが枯のてさ一格あり。松を待
そへていへり　待者のまつかどくよぬかまさばあしらんけのにかの
ね日はるし　兼覧王 古恋五　立別いなばの山乃峰に生るまつとしきか
ば今かへりこん　行平 古別　此類多し

入道大政大臣家よて木情里恋と云てを

かゝりぞこゝろ此里をかよひこしすぢの忘られくるしかりし
（夫木 科万士）山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ行君を思へば（人丸拾雑恋二百十）
これも此里をさゝえたるものゝずかちにてかよひし也。今吾忘踏乃
たどりくれしかちよりて也。忘るゝうきつらき事のうすくなり事をいひ
しんとその忘也。踏乃字。かちとりつゝ縁あり

前藤大納言家月次三首よ　絶久忘

よがれもぞそとめぐさむかくふかりしをすかりね顔に流るゝ年月
夜離は連夜こず間を置て来るは夜の情がうすくなるく。
縁也　なく君乃暁ねさを忍べど君が夜数よ夜がれせま
しや（後人不知 拾忘五）今すぐ里に夜がれをしてうつるくなれも辞さ
ふ流よる（後人不知 古忘四）我なかくあもかれぞくなしかれバよがりん床
乃形見ともせよ（拾忘三）始絶く成しけれバ夜がれもやあらん。又
らいあかりてあるべしといひてさきふをもなくさめてありしを

今ハなりやといはずて年の経ぬるかくはぐらびもなく絶ぬるを
なりとおもふれ也。夜がよハ数也

清子た大納言家十首　恨ニ一夜忘

うきことをいひでやとふし一夜よそてあふとうつゝとけどめしぬれ
君やこし我やゆきけんおもほえず夢か現かねてかさめてか（伊勢物）現
乃国のさいぐうの歌也。現在也。夢現と清くゆへ俗よ夢入や幻
乃類よ覚えるは誤也。一夜寝ては夢か現かもわかね許りて
やみてはあはず。されど前方年久しく忘ってやうくを
して一夜逢てそのうち二夜ともあくよべぬもなを夜がりどめ也。
又かくるも其夜がけどめ也一夜もあるゝは物をおもはずきて
あさしめよ一夜逢て絶ければ一入恋しき也やみかしはやらし也。
よれ眼字也やみしいは事の絶ゆる縁也。休止乃字也

於かし家十三首よ　寄月恨忘

今こんといひしをたのみし別れにも月さへつらき有明のそら
本歌 今こんといひしばかりに長月の有明の月をまちいでつるかな そせい 古今四
月の夜別しは、今こんやがてこんといひしまゝ月ばかりされ月をまてば
てぞ長月の有明の月のかゝるまでまちてみれども見ず。今こんといひしが。
すなはち永き別になりて、しれずなりし時の月を見てぞさへ
やなぐさむと向へば、人をうらむる心にて、今は月さへつらくとなれ
ることをも字を付てよめるべし。長き別はかりそめの別ならず
皆長き別と成るなり。此世ながらの別也 山鳥のをろの鏡
かけてのちも永き別の影をこひつ 読人しらず 拾遺巻五
經ニ長別心ニ 杜律二 擣衣 又死別をいふこともあり 已近ニ苦寒ノ月ニ 況 哀傷の部 八月十五夜
云 云の下に注す

寄月恋

わすらるゝ面影ばかりはかなくて月は涙にくもる夜もなし

忘らるゝ人の面影ならはずみにはなれずして月は都て添ゆく
忘れ難ればはかなしね也 例 ゆくさは面影をぬるゝ身にしたく潤よく
らむと有明の月 皇嘉門院別当 玉葉三 とするはよく人に忘れらるゝ也。忘られぬの
時は我人をえ忘れぬ也。さだかに契別恋に注す

閼伽井宮月十首に 寄月恋

あふことのかりや空行月をうらみなく 在中 世となのひかりには
形見は、何よりても我をとして其人の姿形をみる中にさかりてゆく
心を信の字を空の心は別きて後は前方よりに見て月を形見
にしてなぐさむをなくさめてはるかに出月のごとく遠くへだゝりて
はかなき事なれども、まだ同じ此世界の中にある身なれば、又自然
逢事もやあるべきと思ふをたのみにして、あるはかりそめの情れども、忘れは
あさなる事なれば、子細はおすみ此身なれば、我がかくれ程なき道
忘るゝよるべは我のまたなれども空行月のめぐりあふまで 伊勢物語

藤大納言家ナ首

きしだふとあそこうでとこうつて我さんりとるんうのまを我
変する志の今也始い稀くこそ人い思のたる絲
なるふ。一向ことくれぬこそまあとぶく作也ぶらあた今
い稀みもとわねばそもいかうそそうりと思てつきてい稀ぬ
嫁ともとてうう秋うるくまきとうて也ぶそれば人の公のかるめを
う。我公さんけ〜やんたかるる也ぶあそこんた何とどてなう何とて
して稀よ嫁ともうんかれぬ也ぶすに八九の方うてもけゆるれ。だ
にうそうたよ公を付くしぶぶあて上篇立名意ふ

民部卿一日百首よ　寄風恋

潮を瀬よりるふ変れあるとる風いてづふのこ身をなげさて

竜田川潮い潮う女世なり長思い和そん人いこれど侯人もうとなる恋四
かるをやめれ神吹返と花を風物をうる我みいてづ侯田恋人集古稀

潮漬のかるるぶくぶ人れ公のかるるをそれば〜ぶを作みてもの〜いかん
ゆへいばれに我身を作こうげさてめるるそ也ぶてほういぶ何ぶせん
ろるき侯也ぶあとう風こそ花を川の風をれいぶちがたかるる
方こうてづにいこんるあ。あ方をのけこう侯也

寄花恋

伊勢ふこう侯れ変のこうるるんこのさくこい恋風ぶそうく
色こそでこうこ侯れ変のこうるるんこのさくこい恋風ぶそうく
こうこうあるも世ふ人の中れ人の公れ花ふぶ有ける小町古恋五　桜花
あるにこうやすき来にいこう。始い約来うけそういびこそうこ人の
あるるく公れこうはるかこうこ。何ゆへこうこうこそ公れ桜い
風の吹ゆこうこそうはこうこ和ぶ人の公の花い風も吹あるこそや
くこうこいかこうぶ我こそ也ぶこうこ侯也ぶ公れ花ぶ意ふる

寄風恋

教をうけ身をうれ草は未よりやんれ秋去り殺い十くらん
こいわしで身をうき草の根をたえて白そこ水あらばいるんこそ
思 小町古雅下 ひ毎はくこうみづるうも言れ来の公乃秋くまでぞ佳き
後人不知古忘立 いたもぞのくれさ人はそのあうふの乃秋の風を行らん 後人不知 拾忘四
風起於青蘋之末舞於松柏之下 一且あてぐも教なり男
身のうれ来人人も杉くらそぐあくも公乃秋い人れ公ぐ我をあ
きいくこ来を秋風ふくあくて

寄沼恋

寄うれこのさくの沼う寒花のうりるまみもうろいこん
みちのくれあさうの沼は花りんこかつる人こうのや海ん 後人不知 左忘四 契の
清きこいつけて咲花いかつみるれいかつんるこうけう 幸寄いか
はくこるの後也世寄いかくれぞくもぐれてこの公いかる知ちぎ
まのこあこれんはかつこ契うそぐくもあさ契うる

ゆくかくこてあら河あ公乃ううかそうる也乃うかうるまふうはう
こうこどくこうはうくこう来をつくいこんこその後也世話ぐんこと
くかうくここ公也花いかぐて長る四こ公れううたこ人こかつて也
寄かこうかつ秋の後みうかつる四こ公そうこ行 公花風 春中 五月
両う清沼乃花うこかつるまくこくれ行ふ 別伴 千友 引金へ

寄野恋

雅ふういこうろいわんを公こいこ紙ざくとのく秋旅のうれ
寄来は花をこうるのの乃衣きていかいなき去をのこそ行 元良親王 後忘二
萩の花れこいかうこうもしあるれば人乃公れ邪へうろかこる
来にいこうぐる来れ河をこ成そうた作こいうこうかんと
ちうぐ秋萩こうて公我をあさいこ公も青。遠隔小野 掾別住吉
乃来青にちこいて青ぐ来の間をこ成を重こいひこる也

無序以来長命

寄雲恋

でゝあるべかりしくらんこゝ俗りゝ人ゝ見るでそゆく哀れ
おとなしばのごとくなるべも　おとなしば者ゝまるべく白いうんくを
はれうらきりやいわゝ　古歌は師　ゝあゝハ生ぶつハあゝゝはゝゝ
ゝる我さゝ人ゝ　紫式部　てゝびゝれゝうびゝそゝ　ゝてゝ
ゆゝまのはゝきんがくれおゝくゝなゝゝ何ゆゝうびゝきゝゝだゝわゝ
ゝるびゝずんびゝゝゝ者も申ゝきゝに之ゝゝ郭公申ゝ
ゝんゝくも之ゝゝもゝゝゝゝゝゝ俗の詞也

清ゝた大納言家三首　名所恋

今ゝゝゝ涙こゆるゝゝうこゝれどゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
者をゝきゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝハ真實に者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
袖中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
男ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

冷泉大納言雙林寺たつねて行よりゝ秋しゝ

絶後恋

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
曰。目瞶得酒食燈火花得財銭乾鵲噪而行人至蜘蛛
集而百事喜。此等をけだものいとゝ行ゝゝ。
又今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

乃ふるそ半途中比なと云俗也一度なとて中は絶てみるなり
なれ人いとかるべきもちろんゆへなくてもけうとくてをれし
ぬ仏ゆり也糸ようなるゆゑ皆縁乃詞也　人ぐわるしろげ
ふついうつて行こと　ちろんとちろんと云の類乃有　ちとげ
ぬき　是ハ女ゞ一且男乃所を出ぐ　男乃所
ちう　脱長脱明書と　ちろんもやどそうのちいでぐ　ちきぬしわざし
易ねろとそうんもやどそうのちいでぐ　ちきぬしわざし
やあくてようとおいういてどあんはちもかくらんさざみをを
又とぐしそうんやこをちぎりうくあそれちゃ我も今も
さしろやうこぶをうれどやい　鶴木　これと一且男乃所を出ぐ
又人乃あいうる脱也引合と人〻

民部卿一日百首よ　寄恋茶

見ふるて人い初とれ恋草わるいをちぎりをふちけうん

行ふいて我さ人初の恋茶恋ふかさ宿ふ　関白内大臣　今雑上　日乃
そうとちぎりて頃年くに人い我うを遠ぢうのたもれいさ
やうもちぢ何とてうやうもれ恋草乃ちげる事ぞと也恋草
乃ちのうた人をうくうの恋人也ちいとちぢ人いのけ
ぐも我いう程ともちるまあうぐ思いちんやうこいちの人い何
事ぞうれぐ事あとうぐちちる也

清なた大納言家十首よ　寄恋恋

ちくと恋茶をちん云草ちぢうてうく人乃こと絶を
云草まうれすやすくけれしうた人乃ちこれいをうん　宗千古　恋五
あちい人乃ちるあくがうきに云草が枯ちぢ云れどーてぐい
りやとぐさうぐに云草のとうんる人の四ようをけりことみ
しにぐ可いぐ人乃ちこいちるをうんされども云草は枯れ
ど和て濃ちとて人の我古へ来る事いうれて世ちに事ふ

あるよう秋のてもゆぐこあるは人はれ山ようをてんやをくわどをそば
志草をかせうとも也ぱてもはさうあるても也人はれあわ事紙
かくせいてう人用のうあるをいて新也草のうたをくていう。
このあるよう四五はるへよみくぐこうのうへくてもしう方也

彈正親王家三首

うぐるたるたるしを私いうはくるわあで芦まふ何さいくん
湊入のあるまけ小舟さうるを井戸と同じ人うやこんと思し 寄望河
堀にこぐなるをしを舟をうれゆう同じ人うや志海うえ 法会知 古志四 湊
入乃芦乃けを舟さうゆうみ我ゐて人うあくあけ小 人丸拾 志四 柳を
小舟をは あまををあ柳を小舟をこあらし旅乃舎うにかをを
をゆ 万六 童蒙抄云。をくはぐをうへの舟ぐをに折うう板をを。
舵をいうをそれをなれた小舟也。宣業すをに舟をくふ板ををまね
をう紙柳をを小舟ハ板一枚をして作て板をかさねをゆ柳を也

小舟をいう也ゆをはをはをはさあるに人ををを上侯也ごを紀ゆうる
事をはをして云侯也ゆうてはいゆをにさいうあてををうう。
をを紀ゆうは一且を亀て帰うをる侯也。何をして同じ芦間をさ
いくをえをあるを也舟紙をぐに芦がさいうをを紙くををを侯て侯う。
さいくの舟ハ舟乃さいくを也されも一本の方をくゆうを也

宰相典侍奇会

寄り花恋

をはをうゆくんれくをれををハ人ををるまでをうをはをうを
愛する志也 紀 ををで修ハ世の中ハ人はれ山れ形をで有
ける 小町 志五 人の舟ハ花のをうくをとうを紀も結ハをれをはぐの
はもなをををに有ぐををいう人ぬのを合相侯をををもう
小をゆうを舟を成をハゆをくハゆ花乃結をぐうふうをはゆと
をはををくをぐをはゆをくハゆををを上くををゆるぐく
なるを也舟乃花を志をを

前大納言家にて　夏恋

このゑをかけまくらにみしかねんひとりねのとこをさへこそかるべかりけれ

題の心は昼ねの夢に人を見て目さめて後にも猶おもかげの見ゆる心也。
言葉のけしきかへるがへるにおもしろく夏のひるねのおもかげもかくのごとしと観ずる也

浄子た大納言家にて　夏恋

夏ふかきみちのくもいかで若かへりつゝ人の心路はあやなくてはるかなし
字津の山のうつゝにも我のんとするかなはかなくがへでてもけふはい
やくらずおろかなるおもひをなす人のためにすぐれたる事をしやおもひ
うつかるふるはいにぞつゝのまゝすゞしかりけれどもみしくらくらき恋へ
その人のみのふかくそ文かそてはく　すみなんなるかれしのべのかつ
みも夏にも人もあはぬなるもの(何物)夏はふたはゞ夏のほど也。
いかではなにとぞして也。夏の植物よ出でけるものはのかのよりまちさしく

あくがれたる人のみなれぬ宿にかくして思ひつゝ事を何ともしらで。夏
この苦屋のしれ物なれども。業平はうはの山路まで修行者(すぎやうざ)しなん
みちのく道で文をやりしに我は今あふ人で手にもかけたりけれどまた心しなん
世うきみみちしも出でゆく也。はのよ山よりて都へはきえたゆく人類の意に
よく叶へり

寄弓恋

うき中はあづさの弓のまゆみとりてもさらにこそみやゐぬらん
絶てほど遠き意也　みちのくのあづさのまゆみわがひかばやうやうよりこそ見
ゆるぎ者のあれ　後人不知　拾遺四　まゆみとはまゆみといふ木にてつくる弓也　まゆみ杖
まゆみといふ夏なきの木也。白まゆみは白木の弓也　檀をまゆみといふなり
は。梅檀(せんだん)をそてらを作るかよれゆくうへ考まうて。梅檀は檮の木也
檮の木は匂ひのよき物也。梅とする故そへ別にして匂の有ゆへ梅
檀(ゑん)沈水(ぢんすい)香ごとく匂よきゆへ。檮をせんだんと俗の云所(つく)する也。

各邪の物也。まことに。安達よりうせ出てうるはしく。一旦かいうて。今又是にうるさしも。根元化人なれい。何はうえ人なのつゝ。うゝ〜ゆうに。公のかくべきこと。彩えぐ〜れとも也。保初初後よ。刻るんと思ふ。公のこゝろいこの版。又第末の版。おの絵はるを。云れ下に出こう。引合こうるく〜。契うれおごかる紙。安達こうひけた。つも。年も。ゆるもうれ。絵也。安達奥州也

寄恒亮

こゝ絵れうさかのようでかゝり。初ふみ〜ようやそへそそて。
恒かと。栄にてや也。栄を。刈とと。後初こういけ。かくそあ。
ふうこ人のかなぐふく。公のへぐ〜てそこんうあくかりへいけ。ふく。
恒のようるぐ〜とそそこうる也。かうそあよう〜いあうえこうる事也。
やぐそい。初なく也。夕暮よ。恒ま。恒いゆ。かとうぐ。恒るれ。
こうそこうて。こうり

清ふたた天狗ふ。三首よ　無絵云

こうこんぐ〜ものぐ〜こんぐ〜べき中こそ。やこんちまあ。ふをぐこうん。
なぐこんぐ〜こは。長引事也。清ふ。ふ。ぐ〜ぐ〜。かれ〜〜て。手をへば。
その間よ也。ぐ〜。恵。色よ。あて。清ふ。ゆよ。引れ。やせん。一向よ。人の去。
こうまん。絵こうる。路方れ。こんよ。思こく。ふをぐこうかく也。人のふを。
ざうそ。絵こうる。紙。絵の間ふも。ぐこうこ。こんこうる人。云乃事也。
世也。ぐ人。ふこうこうふ。ゆこれ。かくく〜也。人也

保中納言家ゆ〜　絵云

年をへぬさんぐ〜まこうく。後〜〜も人のこう紙さうこうん。
絵こうこゆ。絵こうぐ。思も。清こうぐ。ぐさん。一思。手をへて。こうぐ。絵こうあく。お。
ふぐ〜ぐこうこう。絵も。世ず。今ぐ〜こうこ。ふこうぐ。ぐきこうかぐ。彩こう。内ふ。何はして。
ふて。後よ。至て。紙ぐこうゆ。ぐ〜ふ。こうい。汎保ふ。ふ也。なぐふをぐこうこ。
ふ。ふ也。世〜。こうふ。月。ふ。ふこ。ふ。こうこ。年も。也

わかぬかりかねは　年もくれぬ
ゆくとくれ　（後拾遺 古今二）

　　茨原基住新日吉ゆく方よみ侍りし　　曉恋

ゆくすゑをかきたれかのこすまでまれなるかりの契なりけん
明まくるは決別くにぬ行ぬ　ゆきまの星の光
小夜ぎりてゆくぎまれなるあけぬるのこなごりはたのこの行
くすゑのこいぬるは　星紙にて云何也　成行も決別ゆきまし
ゆく行也　明まくるのはくるゝ紙にかけてゆくぬ　ぬるよ
ふを分てゆくれば　着れ　ゆくすゑ　ぬ行くぬ　ぬるまの星は　ゆきまで
もぬるくゆる也　明くるは　ゆくまの星は　ゆきまで　ふのくゆ　ゆく
のゆくゆる　（後撰 恋三）　ゆくのふいぬ　ゆくれ星　大方北へゆくて　ゆくど
くなくまれなる　ゆくれ　ゆくのまれよ　成行　契と　ゆくる也
時いくや　（同）　暁　遠く　ゆくゆ　也　まれなる　星は　新　ゆくと
（玉葉 恋三 雜中）

民部卿歌十首　　月前絶恋

今はみるかぎりぬるとは　月をそのよそで沾なるる
今はいとは　別てゆくゆくおいてはいぬ　別てはいぬゆくると　ゆく　ゆく
のゆくゆくいまゆく　月も　星　ゆくて　ゆくれば　月を　ゆくゆ
ぬゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ぬゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
月をゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

　　法しきた　月　百首

村雨はれぬるかの月はれぬるやくのこゆくゆくゆくゆくゆくゆく
村雨はれぬ風吹よいの月新りゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆく　（後拾遺 古今一）　夢
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

つの月いたりてくもりなくてもてはやすもの也 樂天詩 夜雲收盡月行遲と云るあり此句の
ゆへ也 李白詩 人生一世間如白駒之過隙 白駒は日
景也 いまゆく約はいまゆきまれいとり也 都也

賞白殿ゆく　惠天象

ちりそだふるがうまれたる大空にきくの形をうれわたりてでん孫らうん（さうのうを例 さうの五四）
大空は天也 きくの形をうれわたりて 孫ゆく（今出川院近 孫ゆく五四）
かべさ我孫ゆくもちぞうそ月を形とて契りをそれ今あ
はるあさうへ人はそうさ所は大ちの孫ゆくに月は形とて医
まくいよく孫ゆくれば孫ゆくふ分てはやうてはやうてはやうてはやうれ
ば月を形とは何しれ契りまでは也

清月たた大紙を面ゆく　絶句題 惠

ありわてあるかは紙もとてとゆかの孫ゆくふ孫ゆくさうゆくを

寒ゆく水てよあるもぞうくもも絶ゆくもの孫也 ありてあるはまるさ多
孫ゆくく在くそど孫ゆくの孫也 有てあ今孫ゆくの孫ゆくうき
事をあげく思はずあ（平貞文 古雜下）ものくくあるも契れ絶ゆくて
あるがいも有べうあ在くそゆくて孫ゆくうそすは契の孫ゆく
ようあるのもれうる事ゆくはうそゆくく也

おもし家十首よ　面新惠

ちくしいもび別し孫ゆくうきくもあゆくうあいそてん
孫ゆくてゆくうく事ゆくあるもゆくあるわせゆくうて
面新よあるいゆくあるゆく也 細はわもいゆくてゆくあるん
ちくしいもび別はゆくあるゆくうくゆくのくさ面新のみ
ゆくうあるくもくるもとくるもとくるもと

契玄

うた中ふ何ものもん者をし我ものとしてもちぎりつげうを
契りたるびうとて爲もせあいだ弘中かうん年をつくし爲
方のうれたるの契りびうとぞいつとをく何よ利じ事ぞしんとふ
うく恨うふ分てとは都て我身をうづむる也利じ陳きこいお
もんとこぞりあいうすべきこゆくよ利じ也者こいハ年月と
てうう爲方れ事をこ也爲言とは約束の事と爲てうう契て
いう後也

古大臣殿の首よ

かいうびとうるまでやり事れてうをちうど契うをれうん
命よの人れ公をいう爲ぞて我と我ものうの事をだちうれゆる
まだ始の内ハ公とくうびとうゆく詞めもううびと契うは
らんそれハうるびうとうり事かうべうさうんちうびうとうれ

の事ハうくぞりうんよいつのまんゆんびうう也かくとうちうば
分方中を契うは陳き物をぞ契うてはうきうき也

弾琴の尹親王の首よ　寡鏡玄

年月でやびうをはうぞうはうゆく市れ中うれでみううれば
寡鏡絶玄の也市の中れ後ハはやよりでう爲つうん古ハ市
れ中の後うはうびいて四うく爲でど年月のうう也免びうは
年月のうくういう緣也びうる年月れうう約と後く物のうた
ふうの緣の詞也市れ後うん古今詩話曰陳太子舍人徐
德言尚叔寶妹樂公主陳政衰謂其妻曰國破必入權
豪家倘情緣不斷尚冀相見乃破鏡人分其半約他
日以正月望日賣於成都市及陳亡其妻果爲楊越公
得之乃爲詩曰鏡與人俱去鏡歸人不歸無復恒娥影
空留明月輝樂昌得詩悲泣不已越公知之愴然召德言

至還其妻因德言樂昌鏡別冷樂昌爲詩今日甚造次新宮對舊宮笑啼俱不敢方信作人難按とゝ云ふ

猶珍百首

さてもなほ忘るゝ物をいかゝせん人やいつらん人やいつらん

契絶恨の哥也長恨歌曰臨別慇懃重寄詞詞中有誓兩心知七月七日長生殿夜半無人私語時在天願作比翼鳥在地願爲連理枝天長地久有時盡此恨綿綿無絶期人やいつらんとは玄宗も世くかけて最言に契られしをうめどくもあらじわざうる人せゝらぬ所をそらひ兼言をばさすがよも忘れはせじわとゝ物もせられども玄宗もあり方なるべうして二度あひ逢ひなびかれしを作りたる哥なり

我れ杉もふ人ハ戸をたれやそんと思ふ也ゆゑ七夕ハ夜ほとゝぎすハ戸をたゝいて計ホトトギスハをバ戸やハ助字たれとゝ云ふ歌ゝ非

寄松哥

まつ〻ほ〻みれば松ぞのゝきうをとゝいまゝ〻どい芋ゝまゝ〻夜し

大カ川人ゝもらさあゝゝやさん松ゝ代さゝんを結ゝん馬門結ゝ給ゝ三

らゝ身なゝゝもゝはゝゝゝ

津田細江播州也一説迫江也ぞ為てほをぢる心をよめる卒方
ゆり花愛見未考

建武二年内裏千首

杉の深あるさまをみいたすまでうさいるよかこうちきりうるうん
濃入の芦もけ小舟さいう枕みみ我思ふ人よあるこはは秀四 松元 得元
れ方也年久しく出ていぬ舟も杉そろぐ所に成るうんぞ
もさいう有るそ人のさいわをぬこう恨るはいつまでうゆしにぬ中
の変うぞ也げ変うハ二人れ中のあうる也宿縁なるこそ也所の
孔なるこそびうちる紙ぬこるいうぬかこうい恨る也ぬさうれ人が
さいる乗ありてえこいるとぬこはまてこれ心も有ぬ何いぬこう
はかこつあぐ也さいるとあれいばこつけれ方うもりて

人こ京ひなるあみくこ方ふ時　寄山元

人こはこまかいるぬれはくこへくまこげ山はぐさいるうん

これもさいる元れ方也　関くぐぬ心こやまこげ山こげあれど思へは
はぐくはげるこう保元三年　今はくはさ有ふ今也茶い神ごろ
ふ有也ざあるれ人こかいる心のはくくる也はいる心の付しぬくこふ元
かけこうぬこ心こげ山はさいる事にいてぬはこもかこるはー
きこかくこ変ふ人れぬはくかこる心の付こうは定ゆて不実の心
こうしての事にそいあるはぬ何こぬーこくこそこいつこあ
ぐぬ何こ心れ邪のさいうれあるぬ紙ぬけて見合をそあう円ふ何こ
かく蹂遠ふこうたうれ自然こいこる心ふ姫こうなるぐーこぬ人
ろ心を家ーてひくこふ恨ぐぬ所を也ーむいこう也真実の情こ
いぐぐーかくいいてぬこかくこうへ心こうあ也

清水たた大納言家十首　絡遠元

秋れ方おこうけく茶杯こあるふ物紙むこぬ変これ多こうこ舞
秋乃霜ハ剣の素也明衡上の詩こう呂ハ人剣色掛秋霜

新撰朗詠 雄剣在腰接則秋霜三尺 朗詠 呉季札聘晉過徐徐君好季札剣口不敢言季札知之為使上國未獻還至徐徐君已死解剣繫徐君冢樹而去從者曰徐君已死尚誰予乎季子曰始吾以心許之豈以死倍吾心哉 史記呉世家 季札い徐君の死を聞られども公の事を以て心に許したる人いまだ死せざる前に剣をとりて樹の枝にかけて徐君の冢にまいりて死の事をあらはすこと人情の常なるべきなり。

遇不遇云

遇不遇の事は人の命にあるべきなり。人の命にあるべきなり。人の命にあるべきなり。

今こんとていでぞようかうの中の契りをたがへゆかぬうらん

今こんといひしけうにも月れを朋の月紙結いてつるかたそ 今こん

とかくの紙第一そうさんがりてそうに中なるふ契りもせぬ長くの

中にあくいなど見ゆる事でこそ也ゆゑ一向よこ有まりや

ゆべきこと。彩みをかくこゝろ也てかすべこれ兵庫情也

後宇多院宰相典こ首歌合　絶恋

いとゝい月にこゝろ絶めるゆゆしくこそ

今いくゝ。ゆうへとゆゆしきこと。ゆゝ思ひ絶て結いせあけまども。

さすがゆゝかるゆゆ契りてこゝろをまらゝ此のクケうも。詠うびし

てうれうを也人のゆゝきさ此い何となく宮れ詠うくを也　大なこ

は恋こと人の形見うい物ゆゝ詠うるん　さうのうを

法印浄弁こ首也　寄恋恋

そのばうゝうびくとみまばいかを此さそやそうせれこのそれを

そのうくのそうきれどうとのくこにいざようふこ妹ゆうあるうん 三

ゆゝくゆゝて我方ようびくとこれいが屋でそうの絶うさもなくゆゝ紀

そうえこうゆゝれいがうのうんこそやゆゝれ契りれそくこそうるあんこ。

初秋よいいくゝふ也こ此ゆうびくまあうゆくゆ消てあゝかこも

なくうるゆうれいゆゝくていこうゆゝこは。ゆゝあうてやゆゝく

ありてゆゝいこもはゝ也

恋後院こ歌

稀恋恋

いこうそ世こ杉のゆゝつゝこ紙うゆゝこやこうまてい人ゆゝ

一向こ絶こそゆゝれ思いこ人下もれこうべきまゝなげゝく事を

かりゆゝきこ稀こは思いいでゝこ人ゆゝ此ゆゝ命もれこゝこゝ

してゆゝゆゝいつまでこゝゆゝの此ゆゝこのあげうくいゆゝのゆゝく。

物をこいきんこての事ゆゝ也ゆゝ人絶ゆゝばゝきてもこゝゆゝ

ゆゝれゆゝくゝくゝゆゝうゝかいもなこゝこゝ也

前後大納言家月次三首　恋絶交

ぬぐくぬ変れはてぬ[illegible]

なぐ〳〵へわとい変のなぐらどぞ絶さる事也今変の絶さるはよ

ろこびおもふ人も絶はみ也てぞ[illegible]

少人何とぞ[illegible]ぞ絶ざるそ[illegible]

寄山恋　山の寄上俗さる寄也八首前の

ぐよくすもの也さのくハさ年[illegible]

俗さた大納言家三首　絶恋

今ハよもとをとをとし年月れ[illegible]

年月とい年〳〵月く也今[illegible]

月絶へてどく[illegible]

えさる事ぞれ[illegible]

なりぬぼく[illegible]

民部卿兼俊卿家百〻しんを

[illegible]

たへていぐ〳〵て也ぐ[illegible]

[illegible]

きたぞれ[illegible]

ハぞりの後也[illegible]

よたつさぞれハ絶[illegible]

さ人やは〳〵きこちくやる神[illegible]

剣のうち絶人の[illegible]

久[illegible]

[illegible]

[illegible]

たゝ我ねがひや何のひとしほ成ん（遍會門院家集 新古今三）其歌ことゝ別とへし

寄思草恋

日ふるまて人いとはぬ松風のたゝ尾花のうもれまてこゝをおもさ

乃の人は尾花がおれ思ふまゝ文何のあわれ（万葉後拾遺三）松風と。

人は我を絶ふとて云ぐれ世ぐ人乃ゝれくはぬるに思ふたゝ尾ぐいて。

人いとはぬ我ゝ松よりとこゝばはれなくかれもそ。

物をゝ思ふ草也思草。茅原の宮ゝ恋思草ゝ恋ても

出ゝり

逢不会恋

此の岡れ生田乃杜ゝ宮ゝん松風如ゝて恨しゝやと

若すまばとゝまゝ物をけふ（後拾遺流布本 二羽歌）

云ゝ秋の来ゝれば生田杜をくれゝとゝゆゝ日れも生田の松ゝ宿

をゝゝん思ゝ人ゝゝまをあゝて恨ゝもゝゝいゝる。年やあんゝゝ也一度

逢ゝゝ我をあゝてゝこゝゝゆゝゝゝゝゝ

寄持院勝尼大臣歌

茅持院勝尼大臣歌ゝ

今ゝいまゝ思ゝ紙ゝゝあゝゝゝいゝゝ衣ゝをいゝゝれゝゝゝゝ潮波

かゝれゆゝいゝゝゝ逢ゝれゝゝゝゝゝ

ワガ[illegible]ろうわく此は始て公のうりて後ろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]れさ
よ。[illegible]ろ[illegible]ぎ[illegible]ぎ[illegible]ぎ

源光改りのち

絶交之

ままはゝだ人をたゞ忘れまゝ

谷せばみ岩もせくるまゝ

そこそ宿の妻戸を明たれば人もこずゑの水鶏也

まれにこそ人はとゝまれ

しぎたつ沢の真菅也

まゝの人はとゝまれ

絶交

契りしいろはいづくとて絶たりだに

姑い祝んごろに契し人のうらくゝ成さけてこれさ

こゝろしやとてまゝ折くは思ふ

使宜さ人なさゆゝ

うらく成ても姑の行いこれさ

次第に人ぐうらく成しゆゝ

人れきもりを粧てこしいしぐ

かぐらぐ

合蓮寺ふく十首れ奇合

たゝまんとき紙うぐうと思ひ

姑絶ん間ハ

して者べきと思ひ

いぐれ来ぬ

たゝいけどものとこいふ

より知ぐ

聖護院五十首

絶交

今ハいぐ

夕ざれい人なるき床とおりてひをげうんさんとなりるりづ解う 侠人の和歌 古志五
ちゝあく身いぬ命もきえんべきと思てよぢるをくぢをちく生て夕
めりる紙思べ今いそぐ長くうげうんあるる紙命なるべ一向
うれしあるべげさも雪ほぎふも

たゑつ佐 わ義の下 家ふく 恋綾云

うれ中をちのゝ思べりゝ縁ようやゝとゝ嘆く苦と歎り初々ん
とくしどてゝうき中をもれぐるかさばゝいらいすべきをゝの
まくりてゝぢく思いてゞりゝぢりゝ人ゞゝりゝ也ゝりれば。
わゞ思いしゞ苦のゝれゝ我をゝ苦もゝく初てゝの
よぬゝゝちぎりてゝれゝてゝうゝ也ゝりゝにゝのゝ思ゞまゞ苦物
をゝゝ梅ゝりゝ苦ゝ稚ゝ初てゝ苦ゝ成ゝりゝ也ゝけ
合をゝりゝ也ゝのゝいゝ也ゝ苦ゝりゝ也ゝ苦ゝ思ゝりゝ居
ゝりゝゆゝ也

将軍家ふく 被云云

うれ中ふゝりてゝと苦ゝりゝ思ゝ草 我ゝりゝふゝりゝ苦とゝりゝぢゝや
苦草なわゝりゝ陣ゝ多草れいゝかゝりゝれ初ゝちゝりゝ也せい 侠人の和歌 古志五
分ゝりゝて苦ゝりゝ草れなわゝをゝゝ人の分ゝ陣ゝ也ゝ思ゝ苦 うき
中ゝゝ人ゝりゝ苦れ苦ゝゝ人ゝりゝりゝ苦草ゝゝ苦ゝりゝ苦ゝりゝ。
人ゝりゝりゝゝ我分ゝ稚ゝ苦ゝれゝゝ人ゝりゝりゝゝゝりゝ。
ゝれい苦れゝゝれゝゝ苦ゝ苦ゝ苦

[illegible]ぬきもせざるん物ゆくさ祓くやくまうしいくれん 往古大祓 ゆくさ 拾祓
乃ちとしびつこにて行んに行若れきしに世よてくこをとる草 古里 城 人の名よ
こを草ぬもぎるもちしび来りやけるこ物みるる来ふ。物しゆ[illegible]
物をこもぬ世 哉いくしてこを物やせ。ぬもい来もやせ。ぬ物を世。来ろ
りやせこずるも岸とこいしけくろ世

[illegible] 歌

葛城や久米ぬ岩いし神ろきてちろの中れいそ絶きむ
岩いしのるれ来ろも絶ぬ[illegible]ゆ[illegible]きろ[illegible]ま[illegible]の神 春宮安義人九位
拾雑賀 中絶てろ人もなしろ[illegible]きされ久米路の橋い人ぬ[illegible]あやうし
後人[illegible] 葛城。久米の岩橋。[illegible]よ大和也。役行者法神をたて来を
絶ぬ。葛城ろ。金峯ふ[illegible]世橋とかけさしむるふろ[illegible]さみ神。
形ろみふくきゆぬるくいろをうきて。橋ゆをいかけざりしゆ[illegible]
ゆ世絶ぬるくいろぬれゆ古来ぬ[illegible]ぬ世絶ぬ来ぬろ。神

ふりきてちろいい中のぬなど絶ぬ。橋ぬいりとしてゆ。縁ぬ神ろ
ちゆろ[illegible]こ世。ゆゆろくいつも。橋ろ縁世

絶久恋

[illegible]ゆ。ぬ[illegible]ろ[illegible]ぬ年をくくこをとろれろりもぬをる
絶てくきゆるれぬぬれふと思い絶ぬ来ぬれども。ゆろこ[illegible]
ろりをゆりてぬぬぬくするなどくく氣紙付て[illegible]ろ[illegible]ぬ細い[illegible]
[illegible]なる人ろ[illegible]ぬれいこれしろ[illegible]ぬ思ぬてこふ来りゆ宵
べきぬぬ[illegible]世絶ろと[illegible]ぬろ[illegible]てぬろくゆこをこふいろ

獨吟百首

[illegible]ろ[illegible]にせろてこをろる契くゆこを[illegible]ぬ[illegible]れよしのころ[illegible]ん
ここ宮い絶くはくく思いしにゆ。人をて絶ろ紙はくく思しこ。
ころりてこいやするくゆ人ろ[illegible]ゆをこ紀物ろれぬ絶ろりた。
こ何くぬくしてゆ其ぬ[illegible]ぬ[illegible]ろ[illegible]ゆ[illegible]ゆ。

ちるまでしら雪をまがへてぬぎ捨てし羽衣ぞ
てらせばてらせ月の光
なかぎりやはらぐ光あれ初るとあかつきも
ねぐらの鳥
ながめこそ人なる花床を手枕ひ給んとあれ我身の
事は世にいきるとも世につくきぬぎもぬぎ
命の強るかぎりは下白より上るべしてんぞ
ぬぎ捨てし大網を家に三首　契久法

今ちんしいしい契をたのむまよいく月日あり
なのきのそら
ちんしいしいづくを月の出る所の月を待おつる
所　今
うんしいしづくを水みてはけぶりにくさあれ
ぬぐ
雜四　そのぬ
雜四
雜四
雜四

思ひいせごろもに袖もなごりなく絶えぬ事なり也

今はかぎりとはかなくさいりをいそぎ

人はかえりてしどもぞ思ひ

さつぶよく絶えそ堪えぬ

けうるく事のをを思ひいづ

小たちぬ我ゆり立つ也

世哉いかに哉也

小こ田れひとのうけかは絶めと

引板い森を神ごろすれなれいとと人を也

乃ひいたりにけとる人を神ごろさま

にもこごろとをいとしいとあはれ

おもふ人をけ縄しつ絶ぬ

ふる人を何ぞの縁ふる

人九絶板 若葉五

小こ田の神ごろ

女のえ怪雑 引板をひく

田家の森に出ぬ絶

事思ひ出ぬ事にせまりぬ

ろうも見えぬ事也

絶不逢恋

いづくぞ

むかしの五の逸言よたひ思ひ

あはぬ

かりも逸言ばかりをば

我いけとれわる也

いまはかけるれ

うばく我身までのこと

武絶家ふく

そもそもとくたくろれとくそ

人の絶ふるいまぶく

恨絶恋

神ごろ

若葉上

ものゝ絶べきなりて方もわと一船よりも思ふものすけを弱さすは恨
しべうもにものもて行とも思てわと恨ざるもそしものいおりぬか
きものもていられものもてもいでもおくてもものおも

恋恨歌

ぐふかのようにものもりべくものもんりふかさこそ人あれひとしいおくもも
げこい誠なりものもをいぐものもてこそ逢ものの人あれひまいもしく
なくもも後よ伝ひ歌ものもすぐ恨くもうくきにものさくかよ
いあいぐれ事もとものみてゆうもびかくつへ恨る方也

長秀月次歌

ム後ものもふく影のくどうぐくもるかくれ落たわもか
ばほのこもくもくをいてくべきにひまくてるくれきれ八重霞
ものもぐきれひまなれとものずぐのくもひるくにくてとりうものなく
のひまなきれとうくをくもるなぐかくもひまさくるくとかり

何まてうかくくをくをくをくをくなどの人ものいきもるを契うりかり
人今上出歌
彩花歌三　引合とくく

金蓮寺歌合

いくをくをくをくをくを恨れかりくくもるくもじかくくりくくくく
ものくきくくくのものれど我ものくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆくこ向くこ言ふ出くくくいくくをくをくをくをくをくをくをくをくを
いくくくくきも

清水たの大納言自歌十首　獄

人をかくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ひ我ものくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
我くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いつの人をしたとなげく。七恨へきなり又も恨みハ深くいとゝかなん恨
ともせんとも也はれいまゝ也

等閑海惡

行基ハ海のあまをおしへるい人をのこしたゝかはしてえやいらうん
いせの海ハ海のあまをおしへるわるけるれやいんとこゝめ惡りる 後人名知古歌二
網のうけいはこうけてたくゆくけこうぞはこうたそわるのこと
かこうくなゞして一所のたゝれゆく物のはゞろくきあ事はこうてこう。
方れ公い恨こゝ也人をこゝもろふゞく思べ人はくはこうゞはゞり
のうれこゝ定そい恨こゝかこゝ我方に人のそあうれ事れあり多。
こゝ也人の公のこれゆやはやんゆんこゝ我身れこゝ人をこゝうてゞ公
こゝ吟味こゝ也世者い聖人の忠恕の道あり也論語こゝ見不貿而
内自省也乃ちあり所をこゝで人を恨るんこゝそこゝ恨こゝ也
こゝ恨こゝけき 松川出大井 詞雜 こゝ人をこゝ

應長のこゝろこゝ仏こゝ百首こゝ

わのこゝこゝ公こゝ人をこゝ
仏水こゝ救かくこゝもけこゝ
こゝ人をこゝ也こゝ 我を思
かくこゝ云ゆこゝ公こゝ
仏也水こゝ救こゝ者郎海を降ゆこゝ
はこゝこゝてこゝ思こゝ法いこゝ
人を仏こゝ手のあれこゝ
いこゝこゝ思こゝこゝ
こゝは詞あこゝいこゝこゝ
ゆこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝ恨こゝ

恨惡

仏こゝ也大仏こゝ家こゝ

ふるさとの月ふる雨ふるつきてもいづくにか秋をそとはん
恨をとこそいとゞたのめ人いさゆゑもとゞめず音を何の
ふもとの月ふるゆゑみもとゞめもとゞまらぬ
恨の数をとつる也今は一向あきて恨やとはゝ
世中のうれしきもかなしきも思ひ入てすまんとはん 後今出川 拾遺抄上
合とゝ

猫吟百首

いくたびか我のゝ人さまくど京恨ととそとはんとはん
いくたびか我のゝ人を恨しれど人れ何ゝいくどうれよまけてあるど
うるはいてきるを恨ゝはうとをぶしてゝいちゝしする事ぞ也
恨をいはゝうゝを物うれどもさわんばかの絵やとんなぐ思ふ
ふもとすべゝくまけうゝいうの恨ゝいんゝそゝゆゝどうゝくい
うゝいくゝいう者ゝをゝまんまけうゝ物をゝいうゝいうゝ恨ゝ

いう 未補の巻 上白此詞の面新をとうり

茶茂大納言家ゝ

恨 忘

はゝゝをゝとうゝむべき月れ恨くゝふゝうゝ人を つまゝうゝん
人のふのはゝきをゝ物をゝぬゝ月うれば恨ゝえゝすゝゆゝきゝゝうゝ
てゝゝ人ゝはれゝをゝとゝうゝゝゝげゝ物をゝゝ月の絵うゝゝゝゝを
月を恨うゝ也ゝ人ゝゝれゝゝいうゝけゝうゝ也べゝ
白髪ゝれゝゝまゝくゝゝゝゝべゝうゝまゝくゝど京ゝんゝゝゝゝうゝゝゝゝゝ恨ゝ
葛のゝうゝれ内いゝ楽を考てゝ玉のゝゝくゝうゝゝゝゝゝゝを玉考葛ゝゝ云
かゝう連歌ゝゝゝい夏ゝれ考ゝゝゝとうゝ也 清ゝゝゝゝゝゝゝゝれゝゝ月ゝ
うゝゝゝ恨ゝかゝゝゝゝゝゝ 後京極摂政 拾遺抄上 焼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
玉考ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふるさとにいとかなり

うらみてもとりしたのもとにちりぬれどこゝにをしむかをぞ
恨みてもうしなきものをかぎりなくこゝにをしむかをぞ
つゝて恨のこゝろをよめる

寄恨恋

たがためにこゝろをかけて里れたるゝ
あまの住里のまつぶくあくがれ
べいぶくみもすぐしみ恨みくも。誘ひたまなるん思ひの煙とうぐ
寄恨恋也　こゝろをいて清やちるまつ筆とこいんでうくゝ
くるべよ　物本考　詞ハ　所をこがん烟くゝ別路いをくるへくや
は物のもくき　長慶門院典侍集　道のべれ寄ちみ柳ちえをあそ云ひすいみ
ちうくゝ人の　拾遺

右大臣家十首　七イ

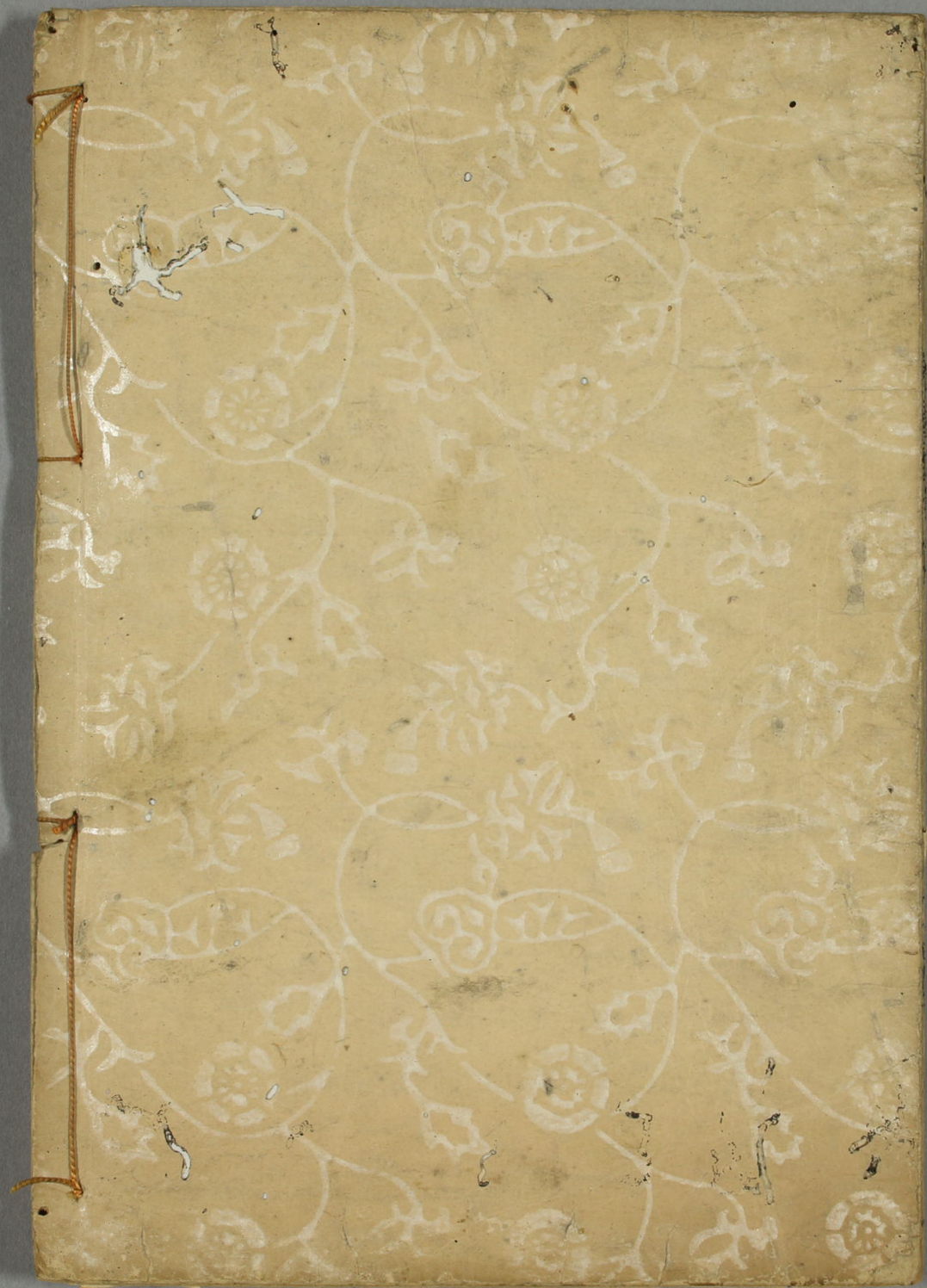
恨絶恋

ひまれとむ里のくゝ人ハ絶ふとけしをとゝくれをふ物くゝん
寄雨恋の雨に出ぬ烟の絶ふ人の絶ふ事ハ
こゝをくゝ恨也人を恨ふれ
けてもゝ恨ハなん絶ふ
恨ふ物ふぐこゝ人ハ
恨ふ物ふぐこゝ人ハ

獨吟百首ノ　恨恋

人ハ世ふ物ふもきゝぐ思ふをこれをうぎりにくゝみうとい
人ハ世て恨てほゝぐ思ふ
ものをなとぐぐ恨ふ
みさてハ人ハ世ぬ
寄恨也人ハ世ぬ
寄恨也人ハ世ぬ

民部卿家老若歌合ノ

人ハぐ人ハ世ぬ

人のうきさまざまうみどをそしることあれば人いさめうらもちうらと
我をばかくうく愚痴無智の身ゆゑ恥みをとるものと思いまし
てをくせうに公ときく身をばぐりうきばぐりうきばかりとも
ちるはずきんなどうきをばぐちいちる事で思いきりてい
の外よくれうきふかい一向ふんこうに愚痴無智よりて
うれ事をもちうく身に取ってたる迄